

# 平城京東市跡推定地の調査 VI

第21次発掘調査概報



平成 10 年

奈良市教育委員会

(表紙)

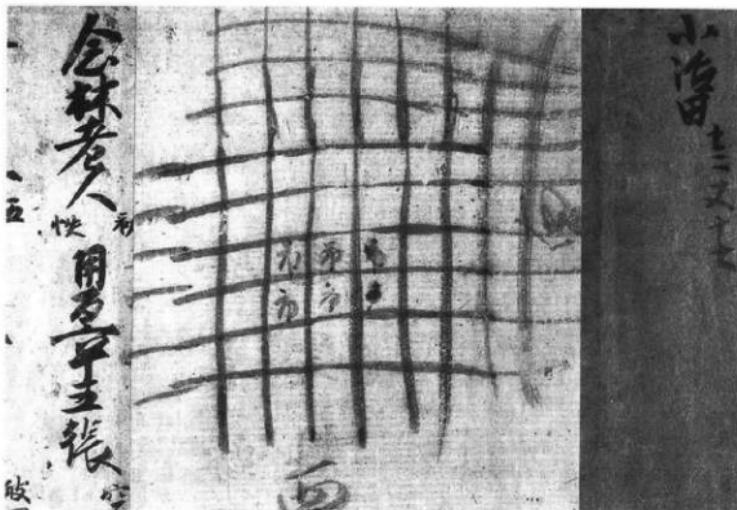


fig. 1 平城京市指圖（淨土宗總本山知恩院所藏『写經所紙筆授受日記』背紙）

## はじめに

奈良市には、約1250年前に首都平城京が置かれ、地下には数多くの文化遺産が残されています。近年、都市開発の進展に伴い、事前の発掘調査が頻繁に実施され、京内の具体的な様相が次第に明らかになってきています。しかし全貌を解くにいたっては、このため特に重要な遺跡は積極的な発掘調査の取り組みが必要です。

こうした考え方のもとに、奈良市教育委員会は昭和56年以来、平城京東市推定地の学術調査を実施してきました。東市は西市とならんで平城京内におかれれた官営の市場であり、奈良時代の経済活動の中核がありました。この遺跡の調査研究が、奈良時代の社会、経済活動を究明するうえで重要なことであることは言うまでもありません。また、この大切な遺跡を永く後世に残していくことは、現在に生きる私たちの責務と考えています。東市跡推定地では、これまでに21次の調査を行ない、今年度も貴重な成果を挙げております。

今回の発掘調査にあたっては、土地の所有者の廣岡政則氏をはじめ、関係各位、諸機関に御理解、御協力いただきました。

厚く感謝いたしますとともに今後ともなお一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げる次第です。

平成10年3月

奈良市教育委員会

教育長 河合 利一

## 例　　言

1. 本書は平成9年度に奈良市杏町585番地において実施した、平城京東市跡推定地（左京八条三坊六坪）第21次発掘調査の概要報告である。
2. 調査次数、調査期間、面積は下記のとおりである。  
第21次調査 平成9年11月13日～平成10年1月14日 約311m<sup>2</sup>
3. 調査は社会教育部文化財課埋蔵文化財調査センターが実施した。現地調査の担当は技術吏員原田憲二郎と調査補助員 烏軒 満である。
4. 調査にあたっては、土地所有者である広岡政則氏から御理解と御協力をいただいた。記して感謝致します。
5. 本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所、浄土宗総本山知恩院から写真、地図を提供していただいた。記して感謝致します。
6. 本書の執筆は、I・II・IVを原田憲二郎、IIIは技術吏員池田裕英が行った。編集は原田が担当した。

## 目　　次

I	はじめに	1
II	検出遺構の概要	3
III	出土遺物の概要	4
IV	まとめ	7

## 図　版　目　次

fig. 1	平城京市指図	表紙裏	fig. 7	発掘区全景（北から）	8
fig. 2	平城京の条坊と東市の位置	1	fig. 8	発掘区全景（南から）	8
fig. 3	過去の調査位置図	2	fig. 9	溝S D307・308・310(北から)	9
tab. 1	東市跡推定地調査一覧表	2	fig. 10	溝S D309（西から）	9
fig. 4	遺構平面図	3	fig. 11	建物S B313（東から）	9
fig. 5	六坪検出遺構平面図	5・6	tab. 2	報告書抄録	10
fig. 6	出土土器	7	fig. 12	平安京東市地図	裏表紙裏

## I はじめに

平城京東市が、西市とともに京内に設けられた官営市場であったことはよく知られている。当時の市に関する史料からは、官人の生活の安定と職務を円滑に遂行させるため、流通経済の中核機構となっていたことや、ときには刑場にもなっていたことがうかがえる。

平城京東市の地を何処に求めるかについては、従来多くの諸説が呈示されてきたが、今日では東市を左京八条三坊五・

六・十一・十二坪の四坪域に比定する説が有力となっている。しかし、いずれの説も文献史料を基本としたものであり、発掘調査による考古学の面からの成果が期待されていた。さらに東市跡という重要性を考えて、市跡の範囲を確認したうえで、保存策を講じる必要もでてきた。

このことから奈良市教育委員会では、平城京東市跡推定地を重要な遺跡と考えて、昭和56年から発掘調査を継続して実施して、今回で17年目となる。第1次から第7次調査では推定地内の条坊道路の確認に主眼を置き調査を行った。その結果、東市に比定されている左京八条三坊五・六・十一・十二坪の4坪分のうちの北・東・西辺の道路およびその側溝、十一・十二坪坪境小路、築地痕跡や築地に開く門を検出し、東市跡推定地の範囲をほぼ確認することができた。また、物資を運ぶために利用されたと考えられる東掘河と共に架けられた木橋、六坪の北西隅では隅櫓と考えられる総柱建物を検出した。第8次調査以降は、六坪内部の利用状況を解明することに主眼を置き調査を進めた。その結果、六坪の中央付近に空き地が存在すること、その空き地の北側には比較的大きな規模の建物と倉庫と考えられる総柱建物が並んで建てられていたこと、東三坊坊間路を検出したことから推定地内は道路によって一坪ごとに区画されていたこと、六坪内の建物は重複関係からみて少なくとも4時期あることが明らかになった。また第19次調査では土器埋納遺構を検出、第12次調査で検出した井戸からは墨書き土器、習書木簡などの文字資料、平城京内では出土例の少ない木履、漆器皿が出土するなど東市跡推定地の遺構の性格を考えるうえでの資料を得た。

このように、これまでの調査によって東市跡推定地内の様相は序々に判明しつつあるが、東市跡推定地を東市と断定するには、未だ資料不足と言わざるを得ない。したがって現状では、今後も引き締めの調査を行い、成果を蓄積し、文献史料からも検討を行うといった包括的な研究をすすめていくことが東市の所在解明につながると考えられる。

こうしたことから、本年度の調査は六坪中央部の様相の解明に主眼を置いた。本年度第21次調査の調査地は、第8・18次調査地の西に隣接して面積311m<sup>2</sup>の発掘区を設定した。調査期間は、平成9年11月13日から平成10年1月14日までである。



fig.2 平城京の条坊と東市の位置図

これまでの調査成果については、奈良市教育委員会『平城京東市跡推定地の調査Ⅰ～XⅢ』(昭和58～平成8年)および奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成5年度「平城京東市跡推定地の調査第15次」』(平成6年)と奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成7年度「平城京東市跡推定地の調査第17次」』(平成8年)奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成9年度「平城京東市跡推定地の調査第20次」』(平成10年)を参照されたい。

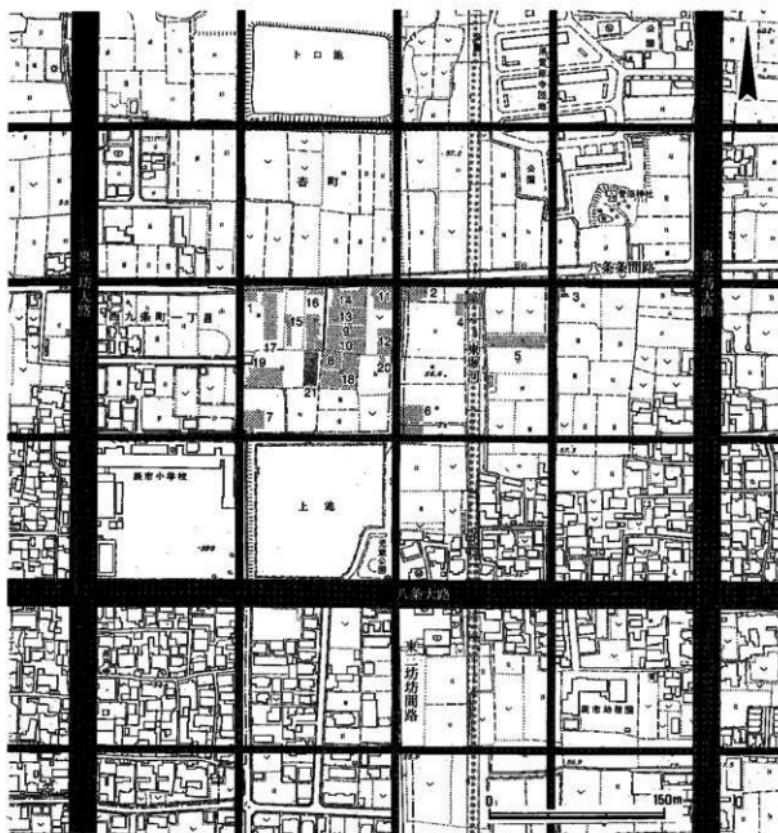


fig. 3 過去の調査位置図 (1/4,000)

調査次数	調査期間	調査地番	面積	調査次数	調査期間	調査地番	面積
第1次	昭和57年2月15日～3月30日	吉町583-1	240m <sup>2</sup>	第12次	平成3年10月14日～11月22日	吉町579-1	300m <sup>2</sup>
第2次	昭和57年3月20日～5月7日	東九条町441-1	340m <sup>2</sup>	第13次	平成4年11月10日～12月18日	吉町580-1	449m <sup>2</sup>
第3次	昭和57年5月19日～6月24日	東九条町403-1-441	125m <sup>2</sup>	第14次	平成5年11月12日～12月27日	吉町580-1	400m <sup>2</sup>
第4次	昭和58年4月20日～6月24日	東九条町441-1-403-1-2	220m <sup>2</sup>	第15次	平成6年2月23日～3月7日	吉町582-1-4	34m <sup>2</sup>
第5次	昭和59年11月9日～12月26日	東九条町445	510m <sup>2</sup>	第16次	平成6年11月17日～12月27日	吉町589-1	325m <sup>2</sup>
第6次	昭和60年1月19日～51年3月8日	東九条町437-638	600m <sup>2</sup>	第17次	平成7年10月2日～11月16日	西町583-1	530m <sup>2</sup>
第7次	昭和61年11月4日～12月1日	吉町592	340m <sup>2</sup>	第18次	平成7年11月21日～12月26日	吉町586	644m <sup>2</sup>
第8次	昭和62年10月21日～12月25日	吉町588-681-1	290m <sup>2</sup>	第19次	平成8年11月18日～12月27日	吉町584	400m <sup>2</sup>
第9次	昭和63年1月26日～平成元年1月1日	吉町580-1	300m <sup>2</sup>	第20次	平成9年9月24日～10月3日	吉町587-1	30m <sup>2</sup>
第10次	平成2年1月17日～3月20日	吉町580-1	410m <sup>2</sup>	第21次	平成9年11月13日～平成10年1月14日	吉町585	311m <sup>2</sup>
第11次	平成2年11月5日～12月28日	吉町589-1	410m <sup>2</sup>				

tab. 1 東市跡推定地調査一覧表

## II 検出遺構の概要

層序 調査区内の基本的な層序は現地表から黒褐色砂質土(耕作土)、灰色砂質土(床土)と続き、地表下約0.4mで黄白色粘土の地山に達する。遺構はすべてこの地山上面で検出した。遺構検出面の標高は概ね56.0mである。

なお調査区南西隅で、奈良時代以前の旧河道1条を東西約3.5m分、南北約10.5m分を検出した。遺構検出面からの深さは約1mまでは確認できたが、湧水とそれによる壁の崩壊のため河底を確認することはできなかった。埋土は灰色粗砂で、遺物は出土しなかった。

検出遺構 検出した遺構には、溝、掘立柱建物、掘立柱塀、上坑がある。主な検出遺構について以下に記す。

S D 307 発掘区中央で検出した南北方向の素掘りの溝である。幅2.6~3m、検出面からの深さ0.1~0.2mで、長さ約18.6mである。溝内埋土は上から順に茶灰色砂質土、黄茶灰色砂質土である。溝内埋土から平安時代前半の土器が出土した。

重複関係から S D 311、S B 312、S A 315より新しいことがわかる。溝心の国土座標はX=-149,016,000、Y=-17,309,100である。

S D 308 S D 307の西側で検出した南北方向の素掘りの溝である。幅1.3~2m、検出面からの深さ0.15~0.25mで、長さ約19.1mである。溝内埋土は上から順に茶灰色砂質土、黄茶灰色砂質土である。溝内埋土から平安時代前半の土器が出土した。重複関係から S B 313より古いことがわかる。溝心の国土座標はX=-149,016,000、Y=-17,316,000である。

S D 309 発掘区北辺で検出した東西方方向の素掘りの溝である。幅約0.5m、検出面からの深さ0.1~0.3mで、溝底は西から東へとゆるやかに下る。長さ約6.5m分検出した。東側は発掘区外へと続くが、同一のものとおもわれる溝が第8次、第18次調査区内で検出されている。埋土は茶灰色砂質土である。溝心の国土座標はX=-149,007,540、Y=-17,311,000で、大坪内を南北に二等分した際のはば中心に位置する。

S D 310 発掘区中央で検出した南北方向の素掘りの溝である。幅約0.6m、検出面からの深さ0.15~0.25mで、溝底は北から南へとゆるやかに下る。長さ約23m分検出した。南側は発掘区外へと続く。埋土は上から順に茶灰色砂質土、黄茶灰色砂質土である。溝内から奈良時代末頃から平安時代初頭にかけての土器が出土し

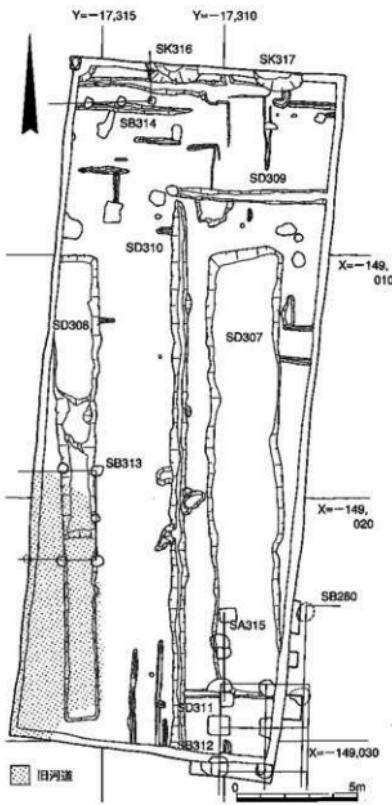


fig. 4 遺構平面図 (1/200)

た。溝心の国土座標は  $X = -149,016.000$ 、 $Y = -17,311.800$  で六坪を東西に二等分した際のはば中心に位置する。

S D311 発掘区南西辺で検出した東西方向の素掘りの溝である。幅約0.4m、検出面からの深さ約0.05mで、長さ約2.3m分を検出した。東側は S D307により、削平をうけているが、同一のものとおもわれる溝が第18次調査区内で検出されている。埋土は茶灰色砂質土である。重複関係から S D307、S B312、S A315より古いことがわかる。溝心の国土座標は  $X = -149,027.940$ 、 $Y = -17,311.000$  である。

S B312 発掘区南東隅で検出した東西2間(3.6m)、南北2間(3.6m)以上の総柱建物である。南、東側は発掘区外へと続く。柱間寸法は東西、南北ともに1.8m(6尺)等間である。東西柱間寸法が等間で3間以上あったとすると、第18次調査区で東側柱列が確認されるはずである。しかし確認されていないことからみて東西2間、南北2間以上のものと考えられる。重複関係から S B311、S A315、S D307より古いことがわかる。

S B313 発掘区西辺で検出した、桁行2間(3.0m)以上、梁間2間(3.6m)の東西棟の掘立柱建物である。西側は発掘区外へと続く。柱間寸法は桁行1.5m(5尺)等間、梁間は1.8m(6尺)等間である。重複関係から S D308より新しいことがわかる。

S B314 発掘区北西隅で検出した、桁行2間(2.4m)以上、梁間2間以上の東西棟の掘立柱建物である。北、西は発掘区外へと続く。柱間寸法は、桁行、梁間とともに1.2m(4尺)等間である。

S A315 発掘区南東辺で検出した掘立柱塀で南北2間(3.6m)である。柱間は1.8m(6尺)等間である。第18次調査で検出した S B280の西側庇ともおもわれたが、建物の主軸に比して方位の振れ、柱穴の規模が違うことなどから塀とした。重複関係から S D307、S D311より古く、S B312より新しいことがわかる。

S K316 発掘区北端で検出した土坑である。北側は発掘区外となるが、南半の形状からみて平面円形とおもわれる。検出面からの深さは約0.85mである。埋土は上から順に茶灰色土、灰褐色砂質土、暗青色細砂である。埋土から奈良時代から平安時代初頭にかけての土器が出土した。

S K317 発掘区北端で検出した土坑である。北側は発掘区外となるが、南半の形状からみて平面円形とおもわれる。検出面からの深さは約0.6mである。埋土は上から順に茶色粘土、黄茶色粘土である。坑内から土器が出土したが、少数のため時期は不明である。

他に東側拡張区内にて、S B280の北西隅柱と西側柱の1つを検出した。このことから S B280は梁間2間(4.8m)で、梁間の柱間寸法は2.4m等間であることが判明した。

### III 出土遺物の概要

遺物は柱穴、溝、土坑から遺物整理箱で3箱分出土した。出土遺物には須恵器、土師器、黒色土器、丸瓦、平瓦がある。以下に主な出土土器について記す。

S D307からは土師器壺、須恵器杯・杯蓋・壺・壺、黒色土器A類楕(1)が出土した。1は磨滅が激しく、調整は不明である。S D308からは土師器杯・皿(2)・高杯・壺、須恵器杯・杯蓋・壺・壺M(3)・壺、黒色土器が出土した。2は器壁が非常に薄く、口縁端部は内側に小さく肥厚する。磨滅が激しく、調整は不明であるが、口縁部外面に指頭圧痕がある。3は口縁部外面につよいナテを加えており、底部外面には糸切り痕跡がある。S D310からは、土師器杯A(4)・皿A(5)・壺、須恵器杯B(6)・杯蓋・皿C(7)・壺・壺が出土した。4は口縁部上半が強く横なでさ

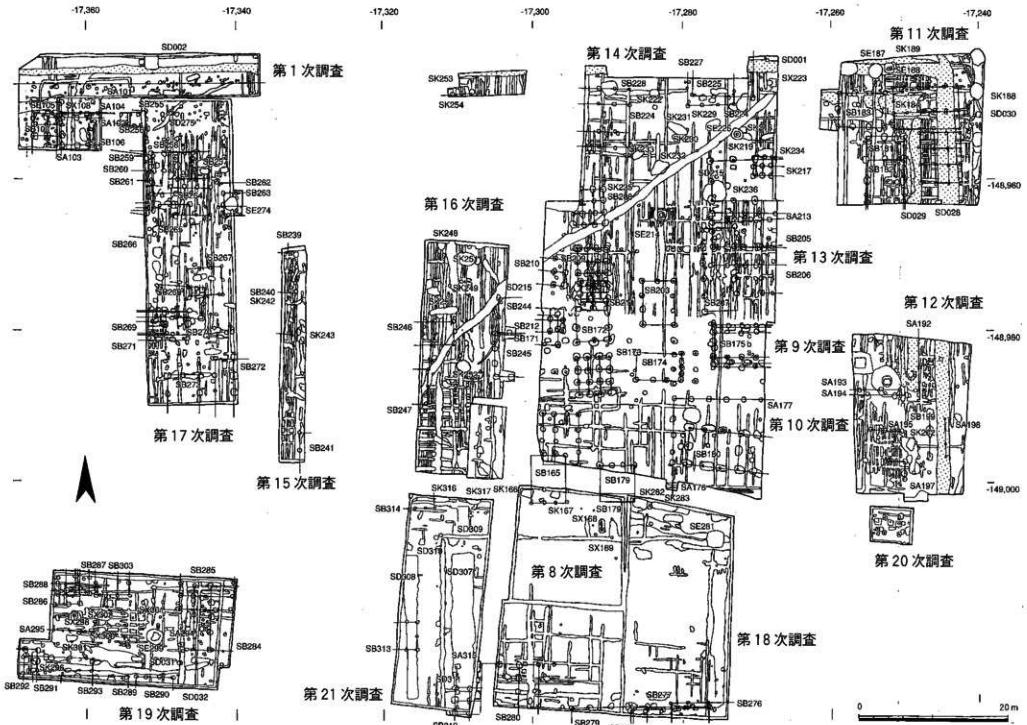


Fig. 5 六坪後出造構平面図 (1/500)

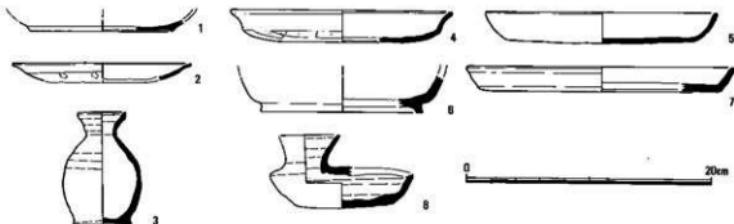


fig. 6 出土土器 (1/4)

れ、底部外面にへら削りがみられる。河内系のものである可能性が考えられる。5は磨滅が激しいが、口縁部は横なでされている。6・7は口縁部、底部の調整はともにロクロナデである。SK317からは平瓶（8）が出土した。底部外面の調整はヘラキリの後、軽くナデつけたもので、口縁部・体部の調整はロクロナデである。

これらの時期については、SD308出土の土師器皿（2）の法量や形態からみて南都II期新段階1）に位置付けることができる。SD307出土の黒色土器碗（1）はII期中～新段階のものであろう。SD310出土の土師器杯（4）、皿（5）は法量や調整手法などからみて、南都I期中段階（平城宮土器VI）に位置付けられよう<sup>1)</sup>。

#### M まとめ

今回の調査成果をまとめると以下のとおりである。

1. 六坪を南北に二等分した際のはば中心にSD309が位置し、同じく六坪を東西に二等分した際のはば中心にSD310が位置することがわかった。SD309の西端とSD310の北端が接しており、両溝の規模が同じことからすると、この両溝は同時期で、坪内を区画する溝の可能性が考えられる。またSD310から派生しているSD311とSD309の両側溝心間は約20.4m(68尺)で、これら三溝に囲まれた六坪内南東の区画内に第8・18次調査で確認された空き地があることがわかる。このようしたことから、SD309、310、311は同時期で、空き地の範囲を示す溝の可能性も考えられる。
2. SD307とSD308は同じ規模で、埋土の状況、出土遺物の年代も同じであることから、同時期である可能性が高い。両溝が同時期とすると、両溝間の中心が六坪を東西に二等分した際のはば中心に位置すること、両溝の北端が六坪を南北に二等分した際のはば中心に位置することからSD307、SD308間が六坪の坪内道路、SD307がその東側溝、SD308がその西側溝の可能性が考えられる。この坪内道路から六坪内を北半と南半で二分割、さらにその南半を東西に二分割、大きく三分割していた時期があった可能性も考えられる。
- 3.これまでの六坪内の調査では建物は重複関係や建物方位から、少なくとも4時期の変遷があることが判明している。今回の調査でも重複関係からSB312→SA315→SD311→SD307というように4時期の変遷があることが判明した。さらに上記したように、SD307・SD308が同時期と考えると、SD308の埋没後、SB313が建てられていることから、本調査区では5時期の変遷があった可能性がある。出土遺物からSB312→SA315→SD311までが奈良時代頃で、SD307・308→SB313は平安時代以降のものと考えられる。

1) 三好美穂「南都における平安時代前半期の土器様相—土師器の供膳形態を中心とした編年試案—」  
『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1995 奈良市教育委員会

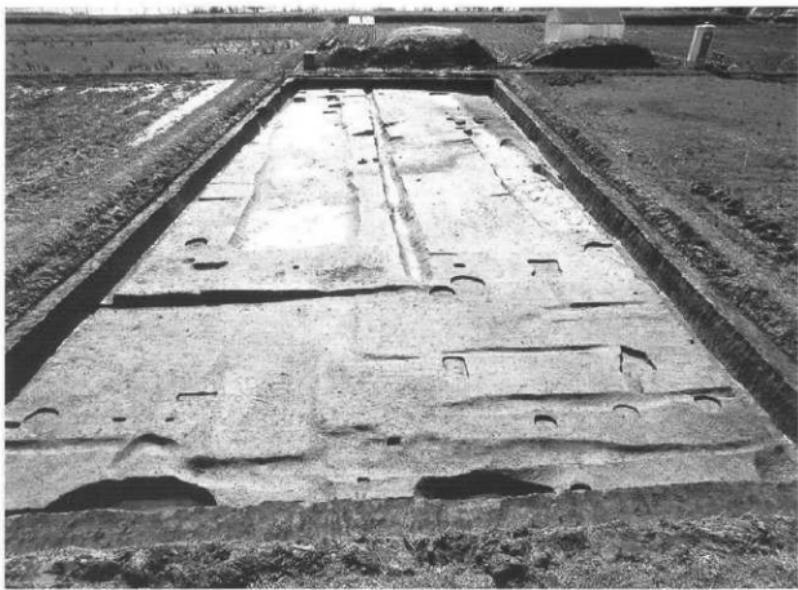


fig. 7 発掘区全景（北から）

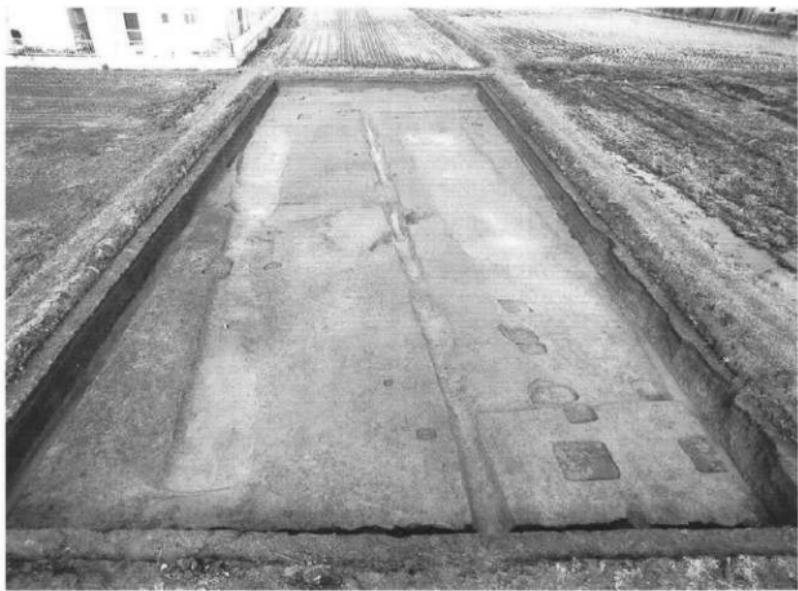


fig. 8 発掘区全景（南から）

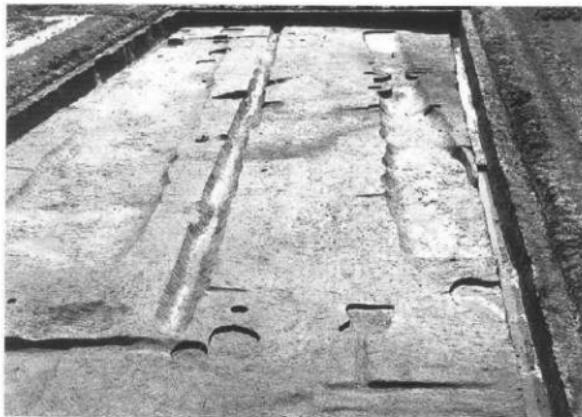


fig. 9 溝 S D307・308  
・310 (北から)



fig. 10 溝 S D309 (西から)



fig. 11 建物 S B313 (東から)

## 報告書抄録

ふりがな	へいじょうきょうひがしいちあとすいていちのちょうさ 16						
書名	平城京東市跡推定地の調査 XVI						
副書名	第21次発掘調査概報						
シリーズ名	平城京東市跡推定地の調査						
シリーズ番号	XVI						
編著者名	技術委員 原田憲二郎						
編集機関	奈良市教育委員会						
所在地	〒630-8012 奈良市二条大路南一丁目1-1 TEL 0742-34-1111						
発行年月	1998年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °' "	南緯 °' "	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
平城京東市 跡推定地	奈良市杏町 585	29201 -	34度 39分 21秒	135度 48分 42秒	1997.11. 13~1998 .1.14	311	重要遺跡 範囲確認 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
平城京東市跡 推定地	都城	奈良時代 平安時代	掘立柱建物 3棟 掘立柱塀 1条 蒸掘溝 5条 土坑 2	土師器 須恵器 黒色土器 丸瓦 平瓦	坪内を区画すると みられる溝を確認		

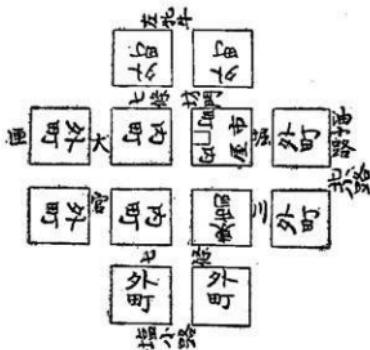


fig. 12 平安京市図 (『拾芥抄』)

## 平城京東市跡推定地の調査 XV

第21次発掘調査概要

平成10年3月25日 印刷

平成10年3月31日 発行

編集・発行 奈良市教育委員会  
(奈良市二条大路南一丁目1-1)

0742-34-1111(代表)

印 刷 共同精版印刷株式会社  
(奈良市三条大路二丁目2-6)

0742-33-1221

0742-33-7035(FAX)

金城先生

利快

開空主張

空